

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520278

研究課題名（和文） 英米文学史におけるソネットの包括的研究の発展と完成
：史的展開の探究と本質論の構築

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on Sonnets in the History of English
And American Literature

研究代表者

桂 文子（KATSURA FUMIKO）

龍谷大学・仏教文化研究所・研究員

研究者番号：00081084

研究成果の概要（和文）：

これまで第1集『ソネット選集—サウジーからスウィンバーンまで—』（主に19世紀のソネットを扱ったもの）および第2集『ソネット選集—ケアリからコールリッジまで—』（主に18世紀を扱ったもの）の2冊を出版した。今回はそれに続く研究として第3集『ソネット選集—ワイアットからハーバートまで—』（主に16-17世紀を扱ったもの）の出版に向けて、最終稿を完成した。このように、時代を遡ってソネットの発展の軌跡をたどることで、韻律構成とテーマにおけるイギリス・ソネットの独自性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We published *English Sonnets from Southey to Swinburne*, a collection of the original sonnets, the translation with notes and the lives of the poets, in April, 2004, then in November, 2007, *English Sonnets from Carew to Coleridge*, a sequel to the first one. At present, we have finished the last draft for the third (from Wyatt to Herbert) of the series. Through this perspective study of the history of English sonnets from 19th to 16th century traced backward, our research has proved the distinctiveness of the English sonnets from the view point of prosody and theme.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000円	360,000円	1,560,000円
2011年度	1,000,000円	300,000円	1,300,000円
2012年度	900,000円	270,000円	1,170,000円
年度			
年度			
総計	3,100,000円	930,000円	4,030,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ソネット、ソネット・シークエンス、16、17世紀英詩

1. 研究開始当初の背景

ソネットは、英文学史上の重要性にもかかわらず、包括的な研究はまだ緒にたばかりである。全時代的にソネットを採録し、包

括的に編纂、概観したものが出版されるようになったのも、最近のことである。たとえば、2000年に *The Oxford Book of Sonnets* (ed. by J. Fuller, 2000)、その翌年には *The Penguin Book of the Sonnet* (ed. by P. Levin,

2001)が出版された。そこでは、従来注目されなかった18世紀の詩人や女性詩人がとりあげられて、ソネットに新たな光が当てられるようになったことが顕著に示されている。また、20世紀の詩人たちのソネットも数多く採録されており、いかにソネットが時代を超えて詩人の詩才を刺激してきたかがうかがわれる。

我々は前著 *The Oxford Book of Sonnets* を底本として、研究にとりかかった。本研究は、平成19年度に採択された科学研究補助金の助成(課題番号19520274)により遂行した研究を引き続き発展させるものである。先の研究の内容は、個々のソネットの精読による2冊のソネット選集(詩人小伝、テキスト、訳、注、作品解説)の出版と、ソネット本質論の構築とその出版を目指す研究会の実施であった。

その結果、19世紀のソネットについては『ソネット選集—サウジーからスウィンバーンまで—』(2004)を、また、18世紀については『ソネット選集—ケアリからコールリッジまで—』を出版し、以下のことが明らかになった。

19世紀はいわゆるロマン派リヴァイヴァルと共にソネットの興隆が見られ、ワーズワースをはじめ、多くの詩人たちがさまざまなテーマで個人の感情や思想をソネットに詠った。ヴィクトリア朝時代になると政治的・社会的にも大きな変化が進み、その変化はソネットの内容・形式にも反映し、世紀末詩人の中には優れたソネット・シークエンスを残した詩人もいた。

18世紀は叙事詩が主流の理知の時代であったが、半ばごろからこの主潮に反逆し、人間の感情の吐露を旨とする作品としてソネットが復活した。その復活と発展に貢献したのは女性詩人たちであった。特に18世紀のソネットについては、今日まで等閑視されてきた群小詩人、なかでも女性詩人のソネット作品を視座に入れることで、これら傍流と主流との密接な関係を反映したソネット全体の見直しにつながった。

研究を進めていく過程で、英米両国においても、最近ソネットの再評価が進み、たとえば、研究書の面でも、*The Art of the Sonnet* (S. Burt & D. Mikics, 2010)、*The Cambridge Companion to the Sonnet* (ed. by A. D. Cousins & P. Howarth, 2011) など、出版があいついでおり、このような学術的動向に呼応して、我が国における本格的なソネット研究の確立を目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソネット形式の詩作品全体を対象として、その歴史の変遷をたどるとともに、変化の中にも変わらないソネットの本質をも明らかにすることにある。

本研究は16、17世紀のソネットに焦点を絞り、既刊の2集に続く第3集『ソネット選集—ワイアットからハーバートまで—』の出版とイギリス・ソネットの発展課程、その特質を明らかにすることを目指した。

ソネットはもともとは器楽伴奏で歌う自由な形式の恋の歌であったが、ペトラルカの『カンツォニエーレ』によって一つの規範となったものである。16、17世紀はこのイタリア・ソネットを受容、発展させた時代である。詩人たちがイタリア・ソネットをどのように英語という言語に即して翻案し、韻律構成、内容ともに独自のイギリス・ソネットへと発展させていったのかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究にあたって、具体的作業としては、*The Oxford Book of Sonnets* (ed. by J. Fuller, 2000)をテキストとして、ソネットを共同で読んできた。各人が作品を分担し、精緻な読みと資料の分析に基づき、詩人小伝、訳・注・作品解説を執筆。月二回の研究会に持ち寄った原稿を三人で検討、議論を重ねた。各作品に関して5、6回の議論を重ねた。

資料の収集にあたっては、代表者・分担者の所属大学図書館の利用のみならず、国会図書館、京都・法政・中央・上智各大学図書館に赴いた。また京都府立大学図書館において図書相互貸出制度も大いに利用した。

また、毎年、イギリスの大英図書館、オックスフォード大学図書館、あるいはアメリカ合衆国のハーバード、アマスト大学図書館、アメリカ国会図書館において、資料収集に従事した。アマスト大学フロスト図書館では五大学システムを利用して、マサチューセッツ大学、マウント・ホリヨーク女子大学、スミス女子大学、ハンプシャー大学所蔵の資料も検索、収集が可能であった。

以上の海外図書館では、とりわけ、手稿や出版本諸版といった一次資料や、その他、関連する資料を収集し、研究を深めた。

上記以外に、イギリスの大英博物館、ナショナル・ポートレイト・ギャラリー、その他の美術館では視覚資料を収集した。

詩人たちにゆかりの地にできるだけ足を運んで資料を収集した。

4. 研究成果

ソネットは、16世紀にイタリアから輸入された。それまでイギリスには見られなかった、この短い定形詩は詩人たちの関心を誘い、競うように詩作された。

イギリスへの導入以降のソネットは、言語的制約や、時代が進むにつれての文化・社会の変化に伴って変容を見せ、イギリス特有の特質をもつにいたる。

本研究は、19世紀から遡ってソネットの歴史を追ってきた。本来と逆の方向をとったのは、19世紀の詩のほうが制約が少なく、さまざまな時代、ジャンルを専門とする3人の共同研究には適切と考えたからである。以来6年間の研究を経て、18世紀、17世紀、16世紀と辿ってきた結果、それぞれの時代のソネットのありようの拠って来たる所以が次第に明らかになり、イギリス・ソネットの特質、本質が見えてきた。ここに至って、時間の流れとは逆に遡って読むという、本研究の採った道が適切であったと考えている。

平成22年度からの第2期の研究は、17世紀半ばから遡って16世紀のソネット導入期まで、ここで扱った詩人は、Sir Thomas Wyatt、Earl of Surrey、Giles Fletcher、Edmund Spenser、Sir Walter Raleigh、Fulke Greville、Lord Brooke、Sir Philip Sidney、Sir Arthur Gorges、George Chapman、Henry Constable、Samuel Drayton、Joshua Sylvester、John Davies of Hereford、Thomas Campion、William Alabaster、Barnabe Barnes、Sir John Davies、John Donne、Richard Barnfield、Lord Herbert of Cherbury、William Drummond、Lady Mary Wroth、William Browne、George Herbertの25人である。この時期のソネット詩人としては、イギリスのソネットの形式を確立したShakespeareを見逃すわけにはいかないが、この詩人については、すでにあまりに多くの研究がなされ、注釈書も数多く出版されているので、本研究ではあえて扱わないことにした。

研究対象とした時期は、近代国家として出発したイギリスが、ローマ教会と袂を分かってイギリス国教会を打ち立ててから、国教会の王党派とピューリタンの議会派との間の内乱までで、いわゆるイギリス・ルネサンスを享受し、文学においても、一つのエポックを生み出した時代である。

そこでは、イタリア・ソネットの翻案に始まって、英語という言語に即したさまざまな韻律構成が、実験的に試みられ、イギリス形式（シェイクスピア形式）へと集大成していく。ロマンス語のイタリア語と異なる音韻上の特質を持っているゲルマン語である英語を使う詩人たちが、どのようにソネットというイタリア発祥の形式を受容、再形成していくかを紐解いていくのは、困難ではあっても有意義で楽しい研究であった。

また、もともと恋愛詩であったソネットのテーマは、政治的・社会的・文化的なものへと広がりを見せ、イタリア・ソネットにはなかった多様性をもつようになる。この点においても、古典・人文主義の受容、宗教的・政治的葛藤、さらに、商業発展や新大陸探検等の影響などを取り込んでいくソネットを研究することは、古典時代から中世、近代の流れを検証し考察することにも繋がった。

それゆえ、本研究で扱った詩人たちの作品には、ギリシア・ローマ神話、プラトンやアリストテレスの詩論・哲学、キリスト教思想、ネオ・プラトニズム、新科学や新大陸発見への言及やアリュージョンが、さまざまな形をとって現われ、それらを読み解くのが、研究の妙味でもあった。

もう一つの特徴は、ペトラルカの後を受け、発展させたソネット・シークエンスである。今回取り上げた作品でも、Fletcher、Spenser、Greville、Sidney、Constable、Sir John Davies、Wrothらのものが含まれるが、恋愛の行方を辿るペトラルカのシークエンスの形をとりつつ、哲学や宗教をテーマとするものもある。また行数、脚韻、韻律の制約に加え、各詩の最終行を、次の詩の冒頭行に使うといったさらなる技巧的制約を加えた、「コロネット」にも詩人たちは意欲を示した。本研究でも、Chapmanの一作品を取り上げた。

技巧としては、各行の冒頭と末尾の語でそれぞれ意味のある語を形成する、「行頭行末語呂合わせ」(Acrostiteliostichon)を使ったSylvesterの作品も採りあげた。

この時代の詩人たちの多くは宮廷詩人であった。貴族の家系の出自で、教育を受ける機会に恵まれ、その豊かな教養が、前述のような、さまざまな分野の知識を駆使した詩を書くことを可能にした。

この詩人たちの家系が意外なつながりを見せていることも面白い発見であった。さらに強力なパトロン(パトロネス)として、文人サークルを牽引し、文化圏を形成している人物が、彼らの家系の中に存在していること

も、この時代の詩作品の特質を形成する要素である。血統の上でも、政治的にも、密接な、また複雑な関係をもって、詩人たちは、微妙な読みの可能な詩を生み出したと言える。

以上が、3年間の本研究で分かったことである。この成果は本年度中に『ソネット選集—ワイアットからハーバートまで—』として出版の予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① 武田雅子、岡村眞紀子、John Hollander 著 *Rhyme's Reason* 翻訳 [4]、大阪樟蔭女子大学 英語と文化、査読無、第 2 巻、2013、17-28
- ② 武田雅子、岡村眞紀子、John Hollander 著 *Rhyme's Reason* 翻訳 [3] 大阪樟蔭女子大学紀要、査読無、第 3 巻、2013、119-125
- ③ 岡村眞紀子、川島伸博、ロバート・パートン『憂鬱の解剖』第 1 部第 2 章第 3 節第 11-14 項、京都府立大学学術報告 人文、査読無、64 号、2012、77-95
- ④ 桂 文子、Robert Browning, *Parleying with certain People of Importance in their Day (1887)* を読む、ALBION、査読無、復刊第 58 号、2012、55-61
- ⑤ 武田雅子、岡村眞紀子、John Hollander 著 *Rhyme's Reason* 翻訳 [2]、大阪樟蔭女子大学 英語と文化、査読無、第 2 巻、2012、25-36
- ⑥ 武田雅子、岡村眞紀子、John Hollander 著 *Rhyme's Reason* 翻訳 [1]、大阪樟蔭女子大学紀要、査読無、第 2 巻、2012、117-122
- ⑦ 岡村眞紀子、川島伸博、ロバート・パートン『憂鬱の解剖』第 1 部第 2 章第 3 節第 1-10 項、京都府立大学学術報告 人文、査読無、63 号、2011、111-138
- ⑧ 岡村眞紀子、(書評)『上利政彦訳注 歌とソネット 1557』九州大学出版局、2010、494pp、英文學研究、査読有、88 巻、2011、117-122
- ⑨ 武田雅子、英詩入門—いろいろな詩の技法、大阪樟蔭女子大学紀要、査読無、第 1 巻、2011、15-28
- ⑩ 武田雅子、英詩入門—いろいろな詩の技法、補遺、大阪樟蔭女子大学 英語と文化、査読無、第 1 巻、2011、17-32
- ⑪ 岡村眞紀子、川島伸博、ロバート・パー

トン『憂鬱の解剖』第 1 部第 2 章第 2 節、京都府立大学学術報告 人文、査読無、61 号、2010、37-66

- ⑫ 武田雅子、英詩入門—いろいろな詩の形、大阪樟蔭女子大学論集、査読無、第 47 号、2010、31-43
- ⑬ 武田雅子、Patrick Schwenmer、共訳の試み&その翻訳のプロセス(その 3)—J. F. パワーズ作「綿を植えない黒人」—、大阪樟蔭女子大学英米文学会誌、査読無、第 46 号、2010、9-29

[学会発表] (計 5 件)

- ① 岡村眞紀子、The Shadow of Night Illuminated - Knowledge in *The Shadow of Night* by George Chapman, a contemporary of Thomas Harriot、Thomas Harriot Seminar、2012 年 12 月 15 日、ダラム大学、イギリス
- ② 岡村眞紀子、Translating John Donne's *Biathanatos* into Japanese、John Donne Society、2012 年 6 月 26 日、ライデン大学、オランダ
- ③ 岡村眞紀子、The Shadow of Night に光を当てる—ジョージ・チャプマンの知—、十七世紀英文学会関西支部、2012 年 3 月 24 日、大阪 YMCA
- ④ 桂 文子、イギリス・ソネットについて、Colloquium (第 15 回)、2012 年 2 月 15 日、龍谷大学
- ⑤ 岡村眞紀子、Some of the difficulties in translating John Donne's *Biathanatos* into Japanese、Modern Language Association、2010 年 1 月 9 日、J・W・マリOTT・ホテル (ロサンジェルス)、アメリカ合衆国

[図書] (計 3 件)

- ① 吉村伸夫、岡村眞紀子、他 9 名、十七世紀英文学における始めと終わり、十七世紀英文学会、金星堂、2013 発行予定、161-190
- ② 新倉俊一、武田雅子、他 17 名、『エミリ・ディキンソンの詩の世界』国文社、2011、38-53
- ③ 生田省悟、岡村眞紀子、他 11 名、十七世紀英文学と科学、十七世紀英文学会、金星堂、2010、1-26

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂 文子 (KATSURA FUMIKO)

龍谷大学・仏教文化研究所・研究員

研究者番号：00081084

(2)研究分担者

岡村 眞紀子 (OKAMURA MAKIKO)

京都府立大学・文学部・研究員

研究者番号：80123488

武田 雅子 (TAKEDA MASAKO)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：30024475